

私と読書

私はどんなに忙しくても、毎週一度や二度は最寄りの本屋に立寄ることにはしている。そしてたいていの場合、二、三冊の新刊書を求めて帰ることにしている。本屋の書架で私の足を止めさせるところは、政治、経済、法律等とかいてあるところというよりは、むしろ歴史、社会、随筆等の書架である。そこに毎週新たに持ち込まれる新刊書の新鮮な香りと、それを手にした柔かい触覚はたまらなくうれしいものである。生きる悦びを味わうことができる瞬間である。

せっかく求めた本は読まなければもったいない。また読むためにこそ求めたものである。ところが実際には、読書に割愛する時間が十分でないばかりか、頭が散文的になつていて、根気もまた十分ではない。まず一わたり目次を見渡して、そのうち興味を惹く節を読んでみる。順序を追わないで読んでいるうちに全部読了する本もあるし、一節だけで止めてしまう本もある。もちろん日本人のものした本もあれば、訳本もあり、どちらかといえば訳本の方が多いかもしれない。

日本人の本よりは、どうしたものか、訳本の方が読み応えのする本が多いように思う。構想の壮大さ、方法論の雄渾さ、引例の豊富さ、タッチの勢い等において、西欧物の方がすぐれているものが多いように思われてならない。そしてそれは、欧米人が自ら築きあげた欧米文化に誇りと自信をもっているせいではないかと考えられる。中国の古典も、欧米のそれとは全く異質のものではあるが、それ自体われわれの肺腑をうつつ力をもっている。そこには欧米人の思想の紹介もなければ受売りもない。中国人固有の思想が大胆に吐露されて、迫真の魅力をもっている。それらに比して日本人のものには、この東西両文明の流れのいずれかに沿って、よくいえばその忠実な紹介、悪くいえばその模倣という域を、未だ十分には抜け出ていない憾みがある。つまり、みずからの文化に対する誇りと自信に乏しいからであろう。そのいずれにも決めきれず、ユニークなみずからの姿も発見しきれず、東西の間を無闇に彷徨しながら老いてゆきつつあるのが、多くの日本人の姿ではないかということである。

古老の語るところによれば、明治維新のおり、日本には大学北校と大学南校があったそうだ。北校は四書五経を軸とした修身齐家治国の学問を主として教え、南校は西洋の学問

を輸入してこれを教えこむことを主たる任務としていた。ところが明治政府は、この南校を学問のメッカにするという重大な選択を行って、それが今の東京大学になったところである。かくて近代日本の学問の重心は、洋学におかれることになった。そしてそのことは、日本の近代化にそれなりの大きい貢献をしてきたことは疑いを容れない事実である。ところがこの洋学偏重ということが、日本の物質的近代化の面では多彩な花を咲かせたが、その根底にある西洋思想の本体が、どこまで日本人の血肉となり、その実生活を嚮導するのに役立つているかということになる。まことに心細い感じを脱しきれない。

もちろん、明治、大正、昭和にかけての日本の近代化過程の裏にあっても、中国思想の研究はたゆみなくつづけられ、その学燈が消えていたわけではない。否、むしろわれわれの実生活を規律する思想的公準の多くのものは、この中国思想に源流をもっていたことは否めない。それにしても、この二つの大きい思想的潮流の渦中に投げこまれて、右往左往してきた日本であった。そのことは戦後においても変わりがないばかりか、戦後における日本の特異な精神情況は、その平和回復の過程との関連において、より多く西洋思想の側に揺れ動いてきたともいえよう。

ところが、われわれ日本人の精神の渴きは、こういふ過程を通していつこうに癒されることもなく、みずからの思想と生活の投錨点をどこに見出すべきかも決めきれず、依然として彷徨と苦悶を重ねている有様である。真に日本的なもの、われわれが誇りと自信をもち得る固有な日本思想は、いつたい何かという課題は、政治においても、経済においても、さらにはより深く文化の世界においても、発掘され確立されていない現況である。この苦悶は日本人に根深い焦燥心をかり立てていると見えて、日本ほど刊行物の多い国はない。新刊書籍はまさに汗牛充棟、応接にいとまがないほどである。自然、日本人は乱刊乱売乱読となる。その後には沈澱するものは、大いなる誇りでもなければ自信でもなく、また満足でもない。虚ろな精神の渴きだけが、いつまでも残るといふ始末である。

そこで私は、近來切実に考えていることは、乱読を慎もうてはないか、ということである。洋の東西を問わず、歴史の風雪に耐えて、しかも依然強い光彩と生命力を放つ少数の書籍を、自分の実生活の伴侶として、よく読みよく消化し、よく実践するという生き方をとらない限り、われわれの精神の渴きは癒すべくもないのではなからうか。「字は書くのではなく彫るものだ」と道破した哲人があった。読書には狭いが、歴史や時世の理解と物事

の決断に誤らない人がいるものだ。われわれは書架に積まれた書籍の数の多きを誇るべきではない。みずからの実生活に不動の自信と光明をもたらず、珠玉のような数冊の書がほしいものである。一日書庫に入り、玉書を得て寝食を忘れ、かつ読みかつ写すほどの値打ちのある本がほしいものである。読書の効用は文章の彫琢錬磨にあるのではなく、みずからの生活実践の光明を見出すものであるからである。

そうした苦吟を通して、日本人みずからの生活にとけ込み、これを規律し、これを鼓舞する思想は、その源流が洋の東西いずれであろうとも、日本人の血となり、やがてそれが成長して、日本人みずからの壮大な思想と生活と文化を生む契機になるのではなからうか。近時少閑を得て、私はこのようなことを考えている。